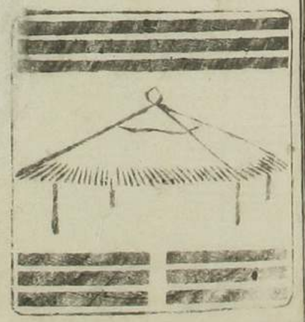
行正記

へ13
2378
65

文化九年

春扇画

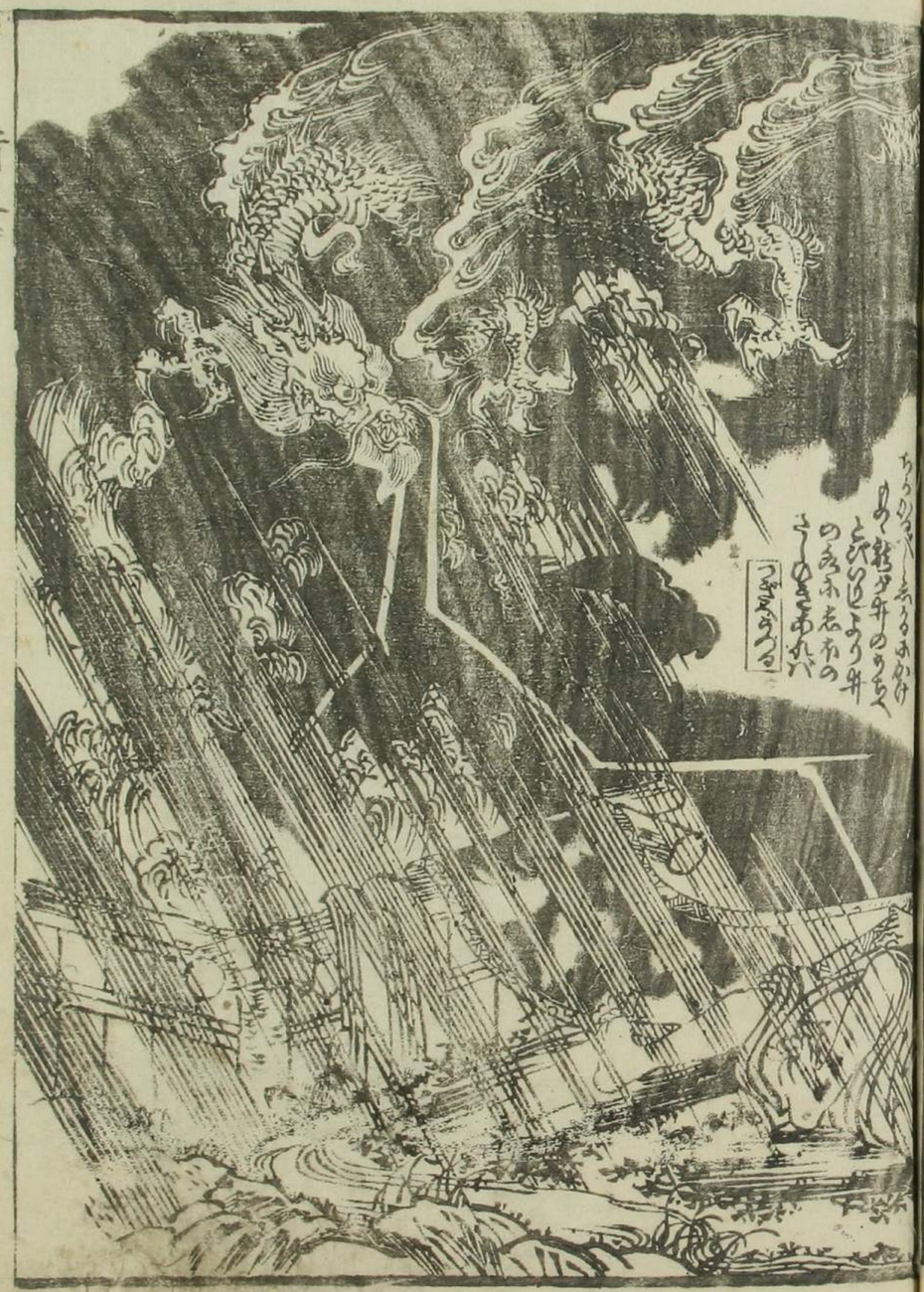
馬琴著

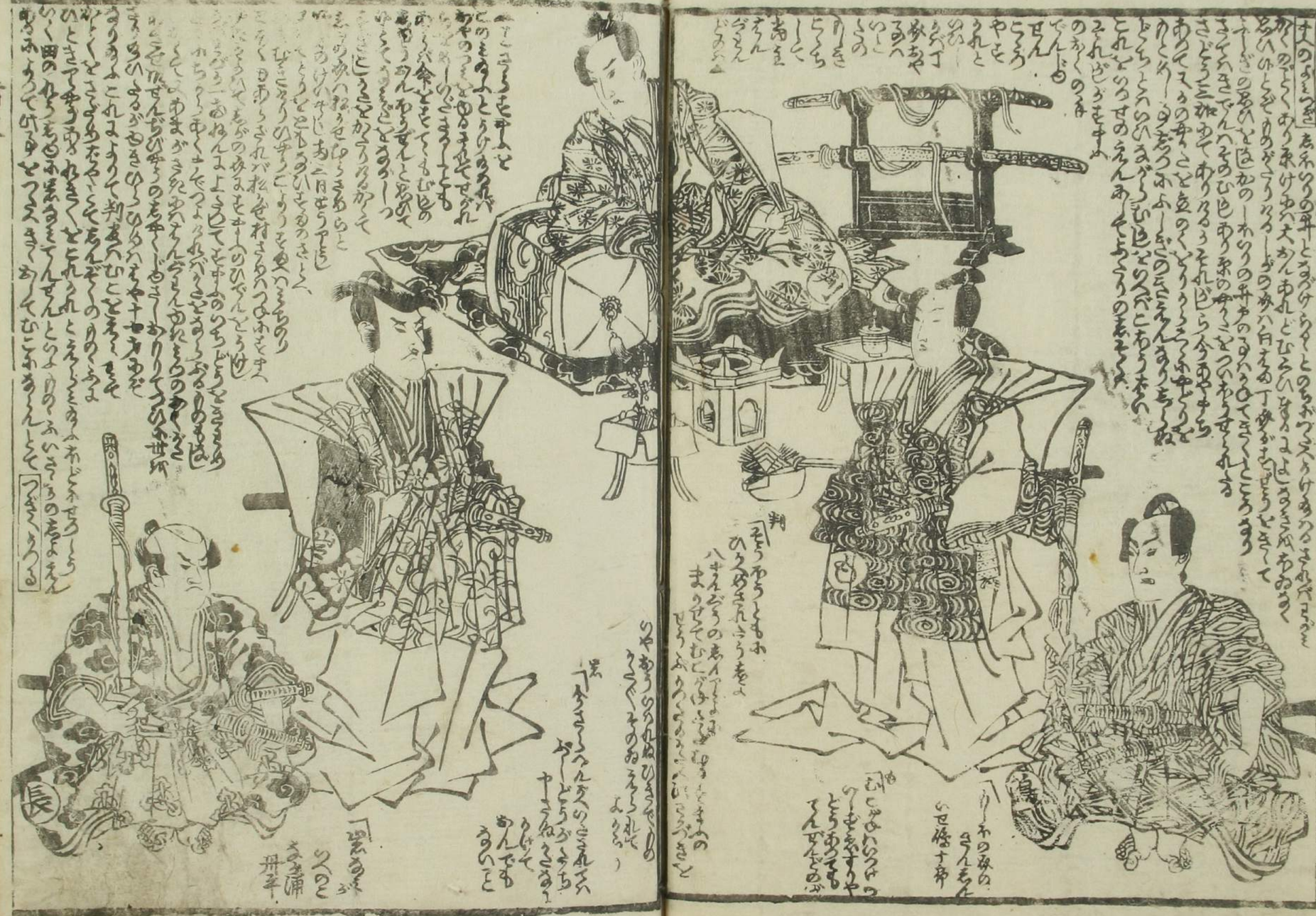


仙鶴堂

遠13
2378
65

姫ひら
かつらの角ゑもん
須磨の赤右
東の松風鉦蔵
新かと試さ非道の手料理。
女子の酌へ。
造悪の後段へ
天の罰盃
助るあの怨の受太刀
あっつきの反吐へ、
とろりとおさまるぞ。其角
恋賀之助妻
残成
岩浪興膳





馬琴
画
扇

馬琴作

五の巻

六の巻

蘭方イクヱンハ

一名やけどかう　但一名ちゃ菜　一貝　三十二文　二十四文

第一火傷に付て火毒を去て水気を吸ひ即時に痛をさり火熱解し愈く跡うの毛一本も疵にるべ却て毛を生ずるなり常よりも多し依て毛を云ふる方に火どく内攻の患決してる紀請合るる　又小児胎毒かさ頂面より首すじ或いは惣身すべて流出て難疵の者とくども此かうを付る則ハ即時に痛み痒みを去り一日一夜の間にかさぶたを成て而胎毒を吸ひ故に内攻の患決してなし　尤重に疵しる家方一通丸をかゝ用て胎毒と下し此かうにて水毒を吸出しいやるる炎こ水と

かざすよりも速効あるなり　一婦人髪かさ良かさ
一男子面瘡ひげかさ一きつひぜんのよう一灸瘡すれども或は
諸のかうやくぬり又い漆のかぶれに妙なり　一雁瘡ちんくさ
一俗ゐいふ鎌いたちかけ肉さけ一疱瘡餘毒より腫物の類又い
胎毒痘瘡さきだつて出かさぶ数日をへるにつけ一盃
夜の間よりそれをもて決して跡疵にならぬ請合奇妙なる
ものと神のごとし

本家調合所　關澤壽軒

同賣弘人　本銀町四丁目南側　丁子屋善五郎